

家 庭 科

1 はじめに

現在、様々な社会の変化に伴い、家庭生活の形態は多様化してきている。家庭における個人の生活時間の重視、家庭や地域社会における人間関係の希薄化などによって、家庭をとりまく生活環境は著しく変化し、子どもたちに大きな影響を与えている。家族一人一人の生活が多忙化し、また子どもたち自身も習いごとや塾に忙しく、家庭で過ごす時間、家族と共に過ごす時間は減少してきている。また生活を共にしない家族も増え、家庭そのものに対する価値観も様々で、家族を一様に定義づけることも難しくなっている。しかし、家庭は子どもの人間形成に大きくかかわり、重要な役割を持つということに変わりはない。

物の豊かさは進んでも心の豊かさは進んでいないといわれる今、まずはこの変化をありのまま受け入れるところから出発したい。そして個人の生活の充実を図ると同時に、人と人とかかわって「共に生きる」という視点から、今一度家族とは、家庭とは何かということに、目を向けていきたいと思う。家族とのふれあいを大切に、人間としての生活を見つめ直すには、豊かな感性を育むことが必要なのではないだろうか。

2 感性を育む家庭科学習

(1) 目指す子ども像

本校では感性を、外界からの刺激に対する敏感さをもとに価値あるものに気づく感覚であり、価値あるもの（知的・論理的・宗教的・芸術的・表現美的）を求める働きを促すものであるととらえている。家庭科では、自分の生活の中から課題を見つけ、それを追究しながらよりよいものを求めていくことにより、豊かな感性を育むことができると考えている。

これらの視点から、家庭科における目指す子ども像をまとめると次のようになる。

- | |
|--------------------------|
| 自分なりの考えをもち、自立した子ども |
| ○自分の生活を楽しもうとする子ども |
| ○自分の生活をよりよいものへと創造していく子ども |

(2) 豊かな気づきや感じとりを育む授業づくり

子どもたちの感性を揺さぶり、豊かな気づきや感じとりを育む家庭科授業を展開するためには、次のような点が大切であると考えられる。

① 題材開発

一人一人の生活実態を把握し、子どもの生活経験に応じた活動を設定する。また、子ども一人一人の思いや願いを生かし、子どもが積極的にかかわっていくことのできような題材を工夫する。

② 体験的活動を取り入れる

体験的活動をできるだけ多く設定し、子どもたちが具体的に思考し、学習を深めていくことができるようにする。また知識・技能面でも、実際に手を動かし、体を動かしながら身につけていくことが大切であると思われる。

③ 友だちとのかかわり

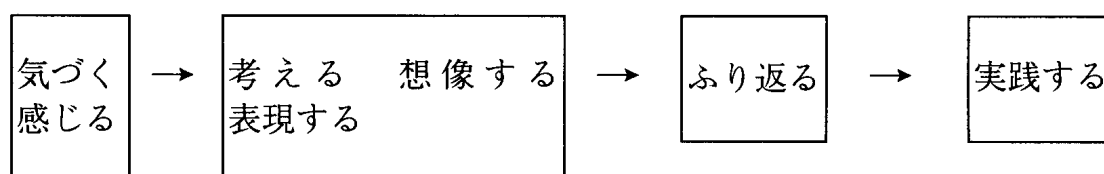
一人一人の考え、発想、よさを大切にする。一人一人のよさは、他のよさとかかわることによってはじめてよさとなる。子どもたちが自分のよさを出し合い、友だちとのかかわりの中で、よりよい価値へと気づいていけるような学習を展開する。そのためには、子どもたちがのびのびと活動できるような雰囲気づくりも大切なポイントである。

④ 評価について

自分の学習を自ら振り返る自己評価や、友だちと共に振り返る相互評価を授業の中に取り入れる。学習のめあてに照らした振り返りを行うことにより、次の新しいめあてを設定することができるようにする。また、教師による励ましや助言の場も必要である。このようにいろいろな評価の場を設定することによって、お互いのよさに気づき、高め合うことができると考えられる。

(3) 学習のステップと支援の手立て

家庭科では、豊かな気づきや感じとりを育むための学習のステップを次のように考えている。



生活を楽しく快適なものにするためには、まず自分の暮らしに関心を持ち、生活を知ることが必要である。これが、生活を見つめ、「気づく・感じる」というステップである。日々の生活の中には、気づかないで見過ごしていることが以外に多くあるものである。そういうことに目を向けさせることによって課題意識が生まれ、自分なりのめあてをもつことができると考える。

次に、自分なりのめあてについて、いろいろな角度から追究していく「考える・想像する・表現する」というステップがある。どのように工夫すればもっとよりよい生活になるかということを、友だちとのかかわりの中で、お互いの考えを出し合いながら探っていくのである。そのためには自分の考えをしっかりとつことができるように、一人学習の時間を保障することも大切である。

そして、その追究方法が適切であったかどうかを「振り返る」というステップがある。ここでは自己評価や相互評価を取り入れ、自分のめあてに照らして振り返ってみる。

「実践する」というステップでは、いよいよ学習したことを自分の生活の中で確かめてみる活動を行う。一人一人の生活は異なるので、自分の生活に応じた実践ができるかどうか重要になってくる。ここで初めて、学習したことを自分の生活に生かすことができるのである。またこれを個人の活動に終わらせるのではなく、それぞれの実践を交流し合うことによって、さらに学習を深めることができるといえる。そして再び新しい課題を見つけて、また追究していくのである。

いうまでもなく、この学習のステップは一応の流れであって、必ずしもこの通りに学習が進んでいくとは限らない。「振り返る」場面で、また新たな課題に気づき、「気づく・感じる」に戻ることもあるかもしれないし、自分のめあてを見つけて、先に実践してみることもあるかもしれない。このように、学習の流れは、題材によって、また子どもの実態に応じて適切に変えていくことが必要であると考えられる。

また、豊かな気づきや感じとりを育むためには、子どもの主体性を大切にしながら、つねに教師が適切な支援をしていくことが大切である。学習のステップに沿った、目ざす子ども像と教師の支援活動を次のようにまとめた。

学習ステップ	めざす子どもの像	支援活動
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">気づく・感じる</div> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">考える 想像する 表現する</div>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活を見つめる。 ・生活の中にひそむ課題に気づく。(疑問や関心を抱く。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活に気づく場を設定する。(生活の観察, 記録化, 家族からの聞き取り) ・体験的学習を取り入れる。 ・視聴覚資料の開発をする。(ゆさぶりをかける資料, ビデオ)
<p>めあてを持つ</p> <p>めあてを追求する</p> <p style="text-align: center;">↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活の中から課題を焦点化する。 ・自分なりの追究方法を見つめる。 ・既習の知識, 技能を生かし, 自分なりのものを創り出すことができる。 ・心の触れ合いを通して生活を向上させようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージを広げさせる。(イメージマップ作り, 聞き取り) ・意思決定の場を確保する。 ・試行錯誤ができる場を設定する。(実習先行方式, 擬似体験学習等) ・自分の考えを明らかにするために, 一人学習の場も保障する。 ・友だちとのかかわりによって学習が深まるようにする。(友だちとの意見交換, ディベート) ・一般的な価値観をおしつけないようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">ふり返る</div> <p style="text-align: center;">↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の追究方法が正しかったかどうか, ふり返る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価, 相互評価をする場を設定する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin-bottom: 10px;">実践する</div> <p style="text-align: center;">↓</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活に合った解決方法を考えて実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習したことを生かし, 生活を変えていく手がかりを提供する。 ・友だちのもっている情報を共有化できるようにする。 ・実践したことを交流し合う場を設定する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content;">再び見直して新しい課題を見つける。</div>		